令和6年度学校評価書

福井県立勝山高等学校

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
教育課程・学習支援	①カリキュラム・ポリシーに掲げた教育活動を実践し、客観的評価に基づいて、個人と組織でカリキュラムマネジメントを実施する。	新学習指導要領の適用、観点別学習評価の運用、カリキュラム・ポリシーに基づく学校運営の開始から３年目となり、教育活動も軌道に乗り始めてきた。カリキュラム・ポリシーに沿った授業実践に取り組んだ教員の割合は97.1%と高く、また会議や研修に参加し授業計画再設計に取り組んだ教員も91.2%と目標指数を上回った。いずれの数値も、昨年度と比較してほとんど差がなく、取組には一定の成果が見られたと考えられる。さらにこれからも全教員が同じ方向に向かって、教育活動に取り組んでいけるように努めていきたい。	カリキュラム・ポリシーに沿った授業実践と、授業改善への取組は継続して行っていくが、今後は生徒の探究的な学びを引き出しているか、生徒がグラデュエーション・ポリシーで示した生徒像にどれだけ近づいているかを検証する年となるだろう。年度始めにカリキュラム・ポリシーやグラデュエーション・ポリシーをしっかりと確認して、各自がそれらを意識した教育活動を計画・実践していく。また、授業改善のための研究・研修の機会を充実させることで授業力向上を図り、カリキュラム・ポリシーやグラデュエーション・ポリシーの実現につなげていきたい。
	②授業においてICTデバイスを活用し、探究的な学び（課題設定・情報収集・整理・分析・まとめ・表現）のために活用する。	ICTデバイスの活用について、本年度は「全授業時数の４分の１以上で活用した教員」の目標数値を70.0%に設定したが、61.8%と目標値に到達しなかった。今後のICT活用に関する取り組みに、様々な創意工夫を加えながら検討していきたい。一方、生徒の9.3%がICTデバイス活用について否定的な回答をしているが、これは「自ら課題を設定し」の部分に対する評価であると思われる。また保護者はICT活用に対する満足度について、91.2%と肯定的な回答であり、今後さらにICTデバイス活用による学習状況等を周知していきたい。	ICTデバイス活用方法は日々進化しており、学習を効果的・効率的に進めるとともに探究的な学びに資する活用方法を常に模索することが、生徒のみならず教員にとっても求められる。そのための情報交換の場を、教員間のみならず生徒と教員間でも設ける取組を今後さらに発展的に進めていきたい。また、ICTデバイス活用状況についての情報発信の機会を増やすとともに、家庭学習でもICTデバイス活用をするような工夫を採り入れ、活用状況の可視化も図りたい。
生徒支援	①容儀を整え自発的に挨拶ができるように、全教職員の共通理解をはかり、継続的な指導に取り組む。	教員の取組指数は97.1%（目標指数95%以上）、生徒の成果指数は99.3%（目標指数 95%以上）、保護者の満足度指数は94.3%(同 90%以上)であり、すべての対象で目標を達成することができた。これは、各クラスの代議員や生活委員が主体となり、容儀の確認を行うことが定着し、生徒が主体的に節度を持って行動している表れであると考える。	挨拶は良好な人間関係を築く第一歩であることを理解させ、今後、さらに自ら進んで、学校、家庭、地域でも元気な挨拶ができるよう集会等で周知する。また、生活委員や生徒会役員が中心となって行う挨拶運動を継続させるとともに、生徒支援部教諭が毎朝生徒玄関で、容儀の確認と挨拶を行う。
	②生徒の人権意識や規範意識が高まるように普段から声かけを行う。	教職員の取組指数は97.1%（目標指数95%以上）、生徒の成果指数は95.7%(同 95%以上）、保護者の満足度指数は92.7%(同 90%以上）で、すべての対象で目標指数を上回ることができた。また、成果指数は生徒と保護者で、ともに前年の成果指数を上回り、満足いく結果となった。	LGBTQ＋など、多様性を尊重しあう社会の確立を目指す取組が重要である。学校では、自他の生命や人権を尊重し、良好な人間関係を築き、思いやりや助け合いの心を持って行動する態度を育てる必要がある。講演会、月頭集会、学年集会などを通して、社会の一員として社会に貢献できる人材の育成を目指したい。
	③学校行事、ルールメイキングなど、生徒の自主的な活動を促す。	教職員の取組指数は94.7%(目標指数95%以上)、生徒の成果指数は97.8%(同95%以上）、保護者の満足度指数は100%(同 95%以上）で、すべての対象でほぼ目標指数を達成することができた。教職員の取組指数がやや低いのは、昨年度まで取り組んできた校則の改正や制服・体操服の見直しなどの取組が一段落したことに起因すると考える。	体育祭や球技大会の会場がジオアリーナを使用することになり、生徒会や委員会が中心となり、生徒自らが主体的に、新しい運営方法や競技を考え実施することができた。今後、学校祭、球技大会、遠足、ルールメイキング、中高連携などで、さらに自主的に活動できるように支援したい。
進路支援	①自らの進路について考える機会の充実と進路情報の効果的な活用を図り、主体的かつ適切な進路選択を支援する。	担任が調査対象となる「面談等による生徒との意思疎通」は、３年連続で目標値100%を達成できた。「生徒への積極的な進路情報提供」は、昨年度より2.3ポイント取組指数が低下し、目標の100%にはあと一歩の状態である。生徒の「面談やガイダンスを通して得た情報により、進路目標を明確に持つ」は、３年生の取組指数が98.9%で昨年度の92.5%を超え、100%目前まで近づいた。１年生84.0%、２年生85.4%という結果も前年度を上回っており、学年進行とともに上昇させるという目標も達成できている。保護者の「進路に関する情報の提供」に対する満足度は昨年度と同じ85.2%で、目標の90%までは開きがある。	生徒が１・２年次からしっかりとした進路目標を持つために、各種模擬試験だけでなく、進路希望調査、進路ガイダンス、小論文・志望理由書指導、企業人によるキャリア教育、大学教授・専門学校講師による模擬講義、就職・公務員ガイダンスなど各種進路支援を実施している。今後も、時代の変化に合わせて内容を見直し、学年会と連携して、生徒たちにとって必要かつ効果的なものを提供する。保護者への進路情報提供については改善を求める声も届いているが、まずは、現在提供しているもの以外にどのような情報をどのような形で求めているのかを把握し、学校として提供すべき情報が何かを明確にした上で対応を検討する。
	②模擬試験等を有効活用し、進路意識向上・学力向上に努める。	５教科担当者の「模試の事前･事後指導」への取組指標は92.3%で、昨年度よりは上昇しているが、目標の100%に届いていない。生徒の「模試への過去問演習や復習の取組」への成果指標は73.3%で、前年度よりより上昇し、目標の70%に到達した。保護者の「模試結果を見ての子供との話し合い」への満足度指標は、昨年度と同様77.7%で、目標の80%には至らなかった。	生徒が自ら、模試の過去問演習や弱点補強のための復習に取り組むように、次年度も継続して学年会・教科と連携し、意識の向上を図る。保護者と生徒は「個票成績綴り」を介して進路について話し合い、それが意思疎通の機会となっているので、今後もこの取組は継続していく。さらに、担任・教科担任が「個票成績綴り」を有効活用し、次の模試では弱点の克服と成績向上を目指し前向きな取組ができるよう、生徒に継続的な働きかけを行う。
	③生徒の進路選択に関わる自主的な活動を生徒に促す。	A+Bの合計が学年を追うごとに向上することを目標とし、３年生では目標指数を90%以上とした。結果は、１年生60.5%、２年生79.6%、３年生90.5%と、全学年で前年度より伸びており、学年を追うごとに向上し、３年生で90%以上という目標に到達できた。また、１年生については前年度の32.1%から大幅に伸びており、オープンキャンパス等各種イベント、大学や地域との連携事業への積極的な参加を早期から呼びかけたことが功を奏した。	生徒各自が早期から自主的に進路選択につながる活動に取り組むことの必要性に気付くことができるよう、今後も支援を継続していく必要がある。学校で実施している行事だけでなく、大学や地域等が実施している様々な対外事業の情報をできる限り生徒に提供し、進路支援部や担任から自主的な参加を個々の生徒に働きかける取り組みを継続・強化することで、進路選択に対する生徒の行動力を引き出していく。
保健管理	①清掃活動に積極的に取り組み、学習環境の美化に努める。	全ての観点で目標指数を上回った。生徒回答の「清掃活動に真面目に取り組んでいる。」の項目でA+Bの合計値は97.1%と、高い水準であった。普通教室がリノベーションによりきれいになったことや、ごみの分別ができるようになり、美化意識が高まったことが一因と考えられる。	日々の清掃活動については、今年度の活動を継続する。清掃への取り組み方を周知徹底させ、状況に応じて注意喚起する等、年間を通して指導していくことで校内美化を進め、満足度をより高められるよう努力する。普通科教室のリノベーションから３年が経ったのでワックスがけは年２回に変更した。
	②不適応やいじめの早期発見・対応と特別支援が必要な生徒への支援の充実に努める。	昨年度に引き続き今年度も、全ての観点で目標指数を上回ることができた。生徒は、「相談しやすい」が88.9%と、目標値を大きく上回り、昨年度を更に上回った。また、保護者の「相談しやすい」も86.0%と目標値を大きく上回り、昨年度より更に8.2ポイント上昇した。外部カウンセラーと協力しながら更に生徒や保護者への働きかけを進めていく。	生徒との関わり、クラス担任・学年会との連携を通して、学校生活への適応に困難さを感じている生徒の早期発見・対応に努める。特に気がかりな生徒への個別対応を充実させる。生徒には、相談室や保健室の役割を保健だよりなどを通して定期的に知らせていく。保護者にも、相談活動について、引き続き情報発信していく。
校外との連携・情報の発信	①総合的な探究の時間、各教科、学校行事等において、学校と地域社会等が連携した取組を実施する。	学校外との連携については、A「関与している」B「おおむね関与している」と回答した教職員が44%ずつで、合計88%だった。目標はA「関与している」だけで50%以上、A・Bの合計が90%以上だったが、それを下回る結果となった。今年度も総合的な探究の時間は、各学年で積極的に学校外の諸団体と連携する活動・学校行事が行われ、担任・副担任を始め、先生方が様々な形で携わってきた。今回、参加する機会が少なかった教員がいたことも明らかになったため、全員体制での取組の徹底を一層進める必要がある。また、授業研究については、学校外と連携した教科もみられたが一部にとどまった。教科における学校外との連携の面でも、企画の提案や更なる支援を行っていく必要がある。	総合的な探究の時間における学校外の諸団体との連携を深める。探究アドバイザーとの一層の連携を進め探究内容をより充実したものにする。探究企画部と教務部が協力し、中高連携や高大連携を意識した授業研究を進める。 また、これまでは、外部との連携に焦点を当てて自身の取組を評価してきたが、次の段階として来年度以降は、連携も含めて生徒の主体性の育成という大きな目標を設定し、学校での活動全般と結びつけて自分たちの取組を評価する形にしていきたいと考える。
	②生徒自身が自分たちの状況を発信する場面を各学期、複数回設定する。	探究の過程や成果を学校外の方々に発表する際の満足度は、91%の生徒がA「十分に満足している」、もしくはB「おおむね満足している」と回答し、目標のA・B合計90%以上を達成した。３年生は７月に開催された「学びの祭典」で最終発表を行い、本校の生徒や学校外の方々と交流し学びを深めた。1・２年生は、ラウンドテーブルなどで小グループの発表を重ねており、回を追うごとに発表内容が充実しプレゼン力も向上している。このような取組の中でも自身の活動に満足していない生徒が９%程度存在しており、探究学習のカリキュラムやファシリテーションのあり方など、よりよいものにしていく必要がある。	生徒の発表の機会を複数回確保する。生徒、教員ともにファシリテーションの技術を高め、生徒が語りやすい雰囲気をつくる。総合的な探究の時間だけでなく、普段の授業や学級活動においても生徒が安心して自分の意見を述べ、それが受け入れられる環境を作るようにする。 また、これまでは、外部への発信に焦点を当てて生徒が自身の取組を評価する形だったが、次の段階として来年度以降は、発信も含めて主体的に学ぼうとする態度を持っているかというより大きな目標を設定し、学校での活動全般と結びつけて自分たちの取組を評価する形にしていきたいと考える。